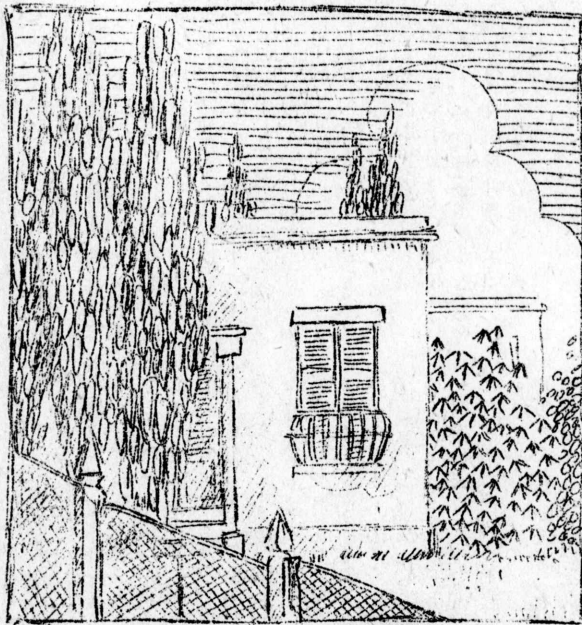


報時丁然爾五

錄附藝文

号三世才

卷五才



Feb.
de
1930

詩と歌

Año V
Núm. XXXIII

SUPLEMENTO LITERARIO

"El Argentin Djijo"

小説『流浪』(二) 狂自生

それから一年余り下宿で寝轉んで居た秀夫には窮乏の日が来た。煙草代は友人から借り、仕事を見付けに行く電車賃まで下宿屋の親命に頼まねばならぬやうに打つて来た。人の世話や新聞の広告で仕事を探して歩いて来たが、語学不交分な新来の彼には中々容易な仕事は見付からなかつた。一時のつれに歌謡者の内にムカモとして落ちついたのはその年の八月の中頃だつた。

朝は早く起きて掃除をしなければならなかつた。晝は主人達の給仕をする。玄關の應對時には気食の呼リンにまで玄關へ走らなければならぬ。ムカモは活は中々不慣れた秀夫には容易ではなかつた。ともすれば遅れ勝ちの仕事の時や手傳つてくれたのはその主人の末娘、マギーだであつた。名前はマルグリータだつたが、娘は自分自身をマギーと呼び愛り種であつた。秀夫が氣まぐれ者のマギーと仲よく打つたのはそれから一週間程も経つてあつた。

或日の午後、二人は覆れて熱い。マックスをした。逢引きは續いた。ドクトルの茶目娘とウナムカモハハネネアとは、他所目には見られぬ珍奇な恋をしたのである。マギーの買つて呉れる煙草は何時かカメルであつた。小ぶるカメルからこつそりと煙草代を呉れるマギーは秀夫にはたまらなく可愛いものであつた。日本の恋の思ひ出は、時々秀夫を陰鬱に包む。その日、日本脱出の動機は、彼女を裏切り、中学教育との結核——此の茶目娘との出来合ひの愛恋!

恋の進展には語学が必要であつた。語学不交分な彼には、恋の極みを掴み得た様に思ふもの、何となく不安があつた。而して二人の逢引きは續く……永し二人の仲は別頭その姉妹によつて露れた。秀夫は、その家を去らなければならぬ。そして新しい仕事を探さねばならなかつた。別れるとすれば悲しい氣がする。が仕事はなかつた。少しばかりの荷物をまとめて、田舎に落ちたのはそれから少し経つてからであつた。ある田舎の農場に働く様になつた秀夫は、飲むより何の味しみも知らなかつた。二月儲けては十月儲けては十月使つた。酒と女! 毎日働いては安價な慰安と夢のつ、その日くを過すのであつた。

ブレエスのマギーからは時々手紙が来た。逢引と逢引して、スペイン語の手紙を思案及び首で讀む秀夫の心は最早中取り返へしのつかない程荒んでゐるのであつた。マギーは、恋と知果の夢と汽車の煙は消へるも、手に掴もうとすればスルリと抜ける。また酒んだ所が男の情事に行くまでだ。恋はすべからず……か。こゝろ酔つ癖の口調で書いてゐる日記は、其の頃のものであらう。田舎のボリッチで買つたロテリアが一萬ペソのフレミタに當つたのは翌年の四月頃であつた。もう四五枚も持つて居ればなア、一枚のデシモを大車に乗り、ボリッチに入れた秀夫は、金を受取りにA駅から汽車に乗つたのはその直後であつた。ブレエス・アイレスには秀夫の爲めにはサタンが多し。金を受取ると、果報は暖か得た。サット同輩で果報は飲んで待て。など、千ペソを手にした彼は飲め續けたのであつた。ルイサよ、ほろかよ、フランセーワ尚よし、エスバニョーラ、

いに似たジヤズの誘惑！ 豊がでふい彼のホルンリョウが
瘦せて行くのが日毎に見へる。最う六ペソ焚ら残った財布
を見て苦笑した緑島は
「ソレだ。今晚限りでまた。カンポに行かう……そして又少し
働いて出て来よう……」
酔少島めには安ヴィノで我慢するが、カバリエの酒は高い
からなア……
と、ボリツチで可なり酔った緑島がカバリエフロリダ
に流れ込んだのは、夜も盛く、一時を少し過ぎたのであ
つた。

X X X X X

踊子屋や、モツソに介抱せられて漸く秀夫は正気づいた。
見知らぬ一人の日本人がコップに水を持つて立つて居る。
新しく正気づいた秀夫を見ると、向ふから声をかけた。
「もう安心し給へ。大丈夫です。ハア僕ですが、僕、緑島藤二
と言ふものです……」
秀夫は手を出して、握手を求めた。
「僕、松村秀夫と言ふ者です。どうがよろしく……」
日本語のからふい、踊り女や、モツソは呆気にとられ
てゐた。

秀夫の酔体と心配した緑島は、その夜、秀夫を自分の下宿
に連れ込んで、自分のカマに寝せながら、自分は床の上で轉
び寝をして一夜を明かしたのであつた。
腹に言い知れぬ苦痛を宿して居る二人の青年、人生の
流浪に淋しい道を瀬ふい心を抱いて、二粒の散れと踊り
場を求め、此の舞島と、死出の旅路の名残りに、たった一
夜の愉快？と踊り場にすこさんとした此の薄命児松村
秀夫……
意味こそ相違あれ、憎みは同じ此の二人の青年が相許す
たとなるには、教日と愛せふかつたのは事実であつた。

それから二人の交際はずいぶん秀夫の荒んだ心も次第に和ら
いで行つた。緑島も秀夫の過去を聞いた時には、誰れにも同
じ失態のア史はあるのだからと苦笑したのであつた。
それから緑島は比較的暢気な氣になつて行つた。然し
秀夫の病氣——肺病——そして、既いうちにコルドベに行
かなければならぬのだと聞かされた時には、流石の緑
島も驚いた。

「松上君、肺病にはコルドベより外に、よい所があるよ。
あの池澤的の空気のコルドベのX市も、ふんふん出ま得へ
くんば、ラリスハ州のチレエシートで養生した方が、良しと云
ふ話だよ。恐ろしく空気の乾燥してゐる所だ。……」
肺病ふんぐ直ぐに治るさうだ。それに居るふん、ふん、
未だ初期と言ふじやないが、そこへ行つて、君の病氣と養
生しやうよ。時に君は汽車賃があるかね。
尤も、君一人分と少々あればよいよ……僕が？僕は電車
で行くよ……ハ……所謂、無賃乗車よ……
其の時、秀夫はロテリアの便が残り、三百ペソ余りあつたの
であつた。
緑島と秀夫がレライ口駅から汽車に乗つたのは、それから
四五日後の事であつた。

四

腰掛の堅い二并列者は、いつも殊ニ喜太の幕有物だ。
クエーリヨ連中より、首巻連中がよい。
面白半分の旅人も居やう。
仕事を求めて田舎に行く者も居やう。而し、車内のどの座席
にも肺病患者らしい者は、只一人も秀夫の目には映らな
かつた。
靜かに夜の幕が下りて、電燈が着くと、クリストロヨの連中
はアルコレランプを取り出して、車内でマテを飲み出す。

久しい太古より
人々の道に七び行くであらう
遠くが未来にも
地をみつむる
静けき睡よ！
かぶしき睡よ！

僕は
今日も
美しき幻影に病む

あ、
今また
秋である

——エペローニ九三〇——

或景色 比雅潤

髪を振乱した
走革命家のように
峻厳として立つユーカリ樹
その足もとに
落魄の姫君のように
よ、と泣き伏す柳……
水は野良犬のやうに
池の周囲をうろついて、

夕暗は
ゆえ知らぬ悲しみを
つかれた田舎に流してゆきます

×彼奴等は
倒錯妄想症に罹る

北岡 健

彼奴等は
倒錯妄想症に罹る

俺達の口を黙らせ
俺達の手足を束縛して
それで俺達を
お前達に殺されたと思ふのか

俺達は
心臓と心臓の觸れ合ひだ！
心と心の合致だ！

俺達は無言の誓を立てるんだ!!
俺達は沈黙の鎖を結ぶんだ!!

こゝろは縛られてゐる

北岡 健

何にも考へてゐないのに
何にもしてゐないのに
こゝろはいつ

なにが夢を描いてゐる

こゝろは可哀想に
いつも鎖の重みを怖れてゐる
それでも黙らずに
自由を夢みてる

オニの故郷 嘉敬伏舟

水が空がラフラフ河
けぢめも分かたず
野が雲がパンパの京
渾たしも知れず
黄水滔々として日夜流れ
眩野漢々として永劫に横はる
嗚呼偉大なるオニ
吾がオニの故郷
アルゼンチン園よ

道行く少女は
花の如く美しく
人の情は厚くして
人種の区別薄く
清き大気は
慈母の乳房にも似て
甘く薫しく
無盡の空は
沐浴千里の裡に埋れて
吾人の束り求むるを待てり
お、恵まれたる自由の天地

吾がオニの故郷
アレゼンチン國よ

吾が魂はこの地にて生れぬ
吾が魂はこの地に住めり
輝き渡る天の目を仰ぎ
歡喜と希望に満ち満ちて
吾が永住の地と想ふ
お、懐かしきお
吾がオニの故郷
アレゼンチン國よ

幻滅

伏舟

変に上下のあるものや
かたはぬきと知りながら
ひこり淋しく床の上は
夢の国なるお嬢さん
おねもす思ふて苦しんだ
涙に晴てるおるものや
ま、ふらぬ世を恨みつ
野奈え山越えわが魂は
君を慕ひて泣する

一九三〇・二・一

彼は病める一匹の犬である

丘谷啓一郎

薄霧に覆はれた

夕暮の町の一角から
病める一匹の犬が現れた。

細長いその顔は
低く土にたれて
小さな眼に目やにが宿り
其の上の二三本の毛は
營養不良の毛並みで
もの、あはれにも
ふるへてる。

車はこの世の
雑音をうけて
回く明が
からからと膝蓋病者の足は
食にうゑた其の体を置ぶには
弱さをなげく。

空の無数の星を
上絛の月は
やはらぎ光を映へてはくれど
今の彼には
何の感嘆もなく
た、あへきつ
塵のための食をあまり
食を細りし其の針金の感覚に
さすさ刺刺と突へるのみ。

まはらな胸毛も
茶褐色のそれらの毛も
塵によこれては居れど

去りし日頃が想はれる
然しまだその心に
青春の想ひはあせす
惜ましの故夜をば
過せし事よ。

からからと
なほも不夢を見つ、
霧の中に映し出された
影を度して消えて行く
彼は病める一匹の犬である。

一九三〇・二・五

歌

夏の目

コリエンテスにて

てい子

浮き上りやがて消ゆく雲の峰
たどるさだめのはましき旅
のそみある朝日よりほ夕はえの
さびしき好む君ふりしかな。
悲しきは西の御空に消えはて、
思ひ出はかり、うつくしきかな。
たわむる、胡蝶あやふし七度も
色香をかしあぢさいの花。
ふと目醒の産かみりの開け時
はてしあらずのおもふ哉。

待らわびて

コリエンスにて

てい子

想ひてし心に秘ぢよふた度は

あはじとせつら筆とりて見つ

まらわびし潮息さかせずかりがねの

見る間に産く御空ゆくなり。

後の世はさほろぎとも身を打して

月の夜すがらすだきもあらなむ。

抱けども訪ふ人もふし余す。

たれうらみつ、露と消ゆらむ。

文がらに身を横たへてうた、ねの

夢にかよわむ、小雨ふる宵。

うさ世

伏 舟

今年より悲すべからずと誓ひし

月日たてはやはり悲しい。

酒とのむ金もなかり昨日より

屋敷を喰ひて心いためり。

この男油断はふらじ物なへは

大口あけて笑ひけるがな。

この男やす事もなく小夜中は

寝言に話さうたひ居るがな。

未ることに金の儲かる話のみ

しては別れぬ子の多き男。

破れたるパンタロン着てこの友は

金の貯る本にあこがれゆくも

金ふことに気取語をして別れ

心腹をる一風のわか友。

近よれば煙とふりてわか塊も

身も焼くはかり火を吐く女。

編輯子より

△此の頃詩と歌の投稿が猛烈に盛んになつた事と讀者と共に喜ぶます。

△としてこれらが盛んにふるると同時に「批評欄」を設けよといふ希望の投稿が、決山舞の上玉のまじり、来月から置く事にせよとしました。ふるべく簡單にせよ、御批評を被ひます。但し無責任な非難は没書にします。又余りにだら／＼長いのは簡單にふはすかも知れませんが、その点は御注意願ひます。

△自分の原稿と一字一句の間違ひはふい飛に……とかが、先週これこれの間違ひがあつたから次号で訂正して置け、とかの御注意が、ちよ／＼ありませう。御注意通り特別に注意して校正致しませう。但し、次号で訂正出来なは限られた紙面に載せ切れぬ程の投稿がある位で、到底不

可能ですから御諒承願つて置きます。

又ふかには原稿それ自身に語や文

法上の誤りが非常に多く、さりとて没書

にするには惜しいといふのも決山ありま

す。さういふのは、本誌の品位を保つため止

むを得ず訂正致しますから、投稿者御

自身原稿をよく御比較されん事を希

望します。

校書家諸氏へ

紙上匿名は差支へふさも、住所氏名は明記のこと。

論文、創作、隨筆

別に規定は設けません

和歌、俳句、題は隨意

……

△末月号より批評欄へ批評及希望投稿と募集します

文藝附録編輯係